真夜中のサンドイッチ

氷翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真夜中のサンドイッチ

【Ｎコード】
Ｎ００１０Ｙ

【作者名】
氷翠

【あらすじ】
夜も遅い刻限。
それでも　図書館に居座り続けていた国家錬金術師・エドワード＝エルリック。
静かなその部屋の扉が叩かれ、訪ねてきたのは…。

（前書き）

今回は『鋼の錬金術師』から。

誤字脱字等ありましたらご連絡ください。

では、どうぞ。

草木も眠るほどの真夜中。

窓の外は月明かりと街灯だけが街を照らしている。
しかし、その月は満月なので　ほの暗いような明るいような、何とも不思議な雰囲気を醸し出している。

どちらかと言えば、小さな蝋燭のランプの灯りだけ灯されている
この部屋のほうが少し暗いかもしれない。
灯りがゆらゆらと揺れるので、尚更そう感じてしまう。

そんな中。

ぱらり　ぱらり　と紙をめくる音が先程から響いていた。

その音のもとを辿ってみるばちょうど部屋の隅に机と椅子があり、
そこで誰かが本を読んでいるようだ。
時折カリカリというペンの音が混じるのは、読んでいる本の内容を
何かに書き込んでいるためだろう。

机の上に乗っている、その部屋唯一の灯りによってぼんやりと浮かび上がるのは、黄ばんだ紙の色と掠れたインクの色。そして。

金色の髪。

さて。
そこで調べ物をしているのは、
金色の髪と瞳、『最年少国家錬金術師』という肩書きを持つ少年。
エドワード＝エルリックである。
堆(うずたか)く積まれた本の山の隙間に自分のノートを狭そうに置き、その上をペンが　さらさらと滑るように文字を書いていく。
積まれている本にはたいてい「ａｌｃｈｅｍｙ」や「ａｌｃｈｅｍｉｓｔ」、つまり「錬金術」や「錬金術師」という言葉がいくつか書かれている。
エドが読んでいるものはどうやら、様々な錬金術師の研究記録のようだ。
ちなみに、こららの記録は全て、東方軍所蔵の物である。
視線が本の上を滑り暗号化されている文章を頭の中で変換して、わかりやすく簡潔に、しかし内容を損なわないように自分のノートに写し取る。
エドは簡単そうにこの作業をやってはいるが、実はかなり難しい。
そんな難しいことをやっているのだ、最年少国家錬金術師の名は伊達ではない。
人とは見かけによらないものだ。
……否(いや)、失礼。

パラリと紙をめくる音。
サラサラと、紙の上をペンが走る音。
エドのものであろう、小さな呼吸の音。

それ以外に、音がない。
本当に静かな、空間。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

コンコン

3つの音しか響かなかった空間(へや)に、また別の音が響く。

ドアをノックする音、そして――――――――

「兄さん。入るよ？」
気の優しそうな少年の、どこかこもったような声。

エドの弟のものだろうその声がしても、彼自身はまったく聞こえていないようで。
そのままずっと、同じ作業をしていた。

「兄さん？いるんでしょう？兄さぁん。」

ガシャン、ガシャンという鉄がふれあい擦りあいぶつかりあう、そんな音をたてて弟は少年がいるであろうその方向へ歩いていく。

彼が鎧で身を包んでいる姿なのは、皆さんももうおわかりだろう。
気付いたエドは　お、と小さな声をあげ、視線を本からあげて物音がした方へ向き、大声で彼を呼ぶ。

「お～い！こっちだ！アル！！」
「あ。こっちだったんだね兄さん。
さっきまで書架で資料を探してるみたいだったから、まだそっちにいるのかと思ったよ。」
エドの所へ駆け寄り　はい　お夜食、と手に持っていた紙の包みを彼に渡すその鎧は、エドの弟・アルフォンス＝エルリック。
兄思いの優しい少年で、彼も錬金術が使える。

ガサガサと包みを開いたエドは「サンドイッチにリンゴか。充分充分。」とご満悦の様子でサンドイッチを掴み、あぐっ、とかぶりついた。
ハムとチーズだけ、という簡単な物ではあるが、これがなかなか美味い。

食べてもご満悦なエド。

パン屑がパラパラと机の上に落ちるのを見て、アルは「兄さんったら…資料にパン屑落ちてるよ。」と言う言葉を、呆れるかのようにため息と共に零す。

エドはアルのその言葉に「あ、やべ。」と急いでパン屑を払った。

どうしても取れないパン屑に　エドが（大佐にバレっちまうかな…）と秘かに心配している時だった。

アルに「ねぇ、兄さん。」と呼ばれる。
なんだ？　と返せば、いきなり投げかけられた質問。
「このサンドイッチ、誰が用意してくれたと思う？」

「……お前じゃねぇの？」
「そんなわけないじゃない。いくら兄さんの為だからって、わざわざ宿（ホテル）の台所を借りたりできないよ。」
「……まぁ、確かにな…」

いくら兄思いの良い弟でも、そんな一歩間違えれば迷惑になるだろう行動は絶対にしない。
それが『アルフォンス＝エルリック』だ。
店で買うにも、もうかなり遅くなっているため一軒も開いていないだろう。
じゃあ……
このサンドイッチはいったい、何だ……？
「……ん～…わかんねぇや。誰が用意したんだ？」
降参、とでも言うように両手を軽く上に挙げるエド。
勿論その口はサンドイッチをくわえたままだ。

その子どもっぽい格好をした兄に小さく笑う声を出すと、アルはそっと答えを言った。

「ホークアイ中尉だよ。」

「……え？」

なにに驚いたかと言えば、別にホークアイ中尉が料理ができた事ではない。
そんな事、前々から知っている（ちなみに、その料理がとても美味い事も知っている）。

「ここに来る途中で　帰宅中の中尉とばったり会っちゃって、訳を話したら……」

『あら、アルフォンス君。こんな夜遅くにどうしたの？』
『あ、ホークアイ中尉。ボク、これから図書館にいる兄さんを迎えに行くんです。
中尉はどうされたんですか？
私服姿でだなんて。』
『深い意味は無いわ。
今日の勤務がやっと終わったから、これから帰るところなの。』
『へぇ…大変ですね、こんな夜遅くまで…』
『大佐が書類整理をサボったからよ。
まったく…お陰様で私まで遅くなってしまったわ…』
『……お疲れさまです。』

『えぇ、ありがとう。
……そうだわ。
アルフォンス君、時間はあまり取らせないから、ちょっと私の家まで付き合ってくれる？』
『……え？』

「……で、サンドイッチを持たされた、と？」
「うん。
『有り合わせな材料で申し訳ないけど、エドワード君によろしくね』って。」
「中尉…。」
「応援してくれてるんだよ、中尉もきっと。」

エドの金色の瞳が、嬉しそうな、でもどこかこそばゆそうに言うアルを見る。

そうなのだ。
こんな真夜中、起きている人はかなり少ない。
ほとんどの人が眠ってしまっているだろう。
しかし、それでも自分に夜食（サンドイッチ）を作ってくれる人がいるのだ。

思いつく限りの人たちの顔を思い浮かべ、ふ　と小さく息をつく。
ちょっと眉を顰（ひそ）めたその時にはきっと、大佐の顔が浮かんでいたのだろう。

「…頑張らないとな。」

「そうだね。」
ぽつりと呟くように言ったエド。
その言葉と一緒に、静かに微笑みを零していたエドの顔を見て、アルは頷く。
頷くと同時に、ガシャリと鎧が鳴いて。

その直後だ。
アルが　何かに気付いたかのように、「あ。」と声を出した。
「どうした？」とエドが聞けば、返ってきた言葉は……

「兄さん。今日はもうこれぐらいにして、宿（ホテル）の方に戻ろうよ。
明日は……っていうかもう今日かな？だいぶ早い汽車に乗るんだろ？
寝る時間が無くなっちゃうよ。」
「大丈夫だよ、アル。
汽車で寝るつもりだからな。

……けどまぁ、出発の準備もしなきゃなんねぇから、もうそろそろ戻るか。」
弟（アル）の言葉にニカッと笑い、ようやく椅子から立ち上がった兄（エド）。

兄のその動きに、まるで喜ぶように「うん！」と頷くと、アルは記録を元の書架に戻すのを手伝った。

絶対に成し遂げると、決めた事がある。
俺たちはそれに向かって、突き進む。

ただ、それだけだ。

そんな自分たちのことを応援してくれる人。
信じてくれる人。
待ってくれる人。

立ち止まるわけにはいかないけれど、そんな人たちがいることを、時折足を止めて考えてみるのも良いのかも知れない。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

図書館からの帰り道。
2人並んで宿(ホテル)へ向かっていた時。

サンドイッチは早々に食べてしまったエドは、残っていたリンゴを片手で空へ放っては捕り、捕っては放ってを繰り返しながら歩いていた。
実に見事な赤色をしたリンゴは、表面がつるりとしていてとても瑞(みず)々しそうであった。

空にある星の光さえ映しそうなほど、艶(つや)やかなリンゴ。
そんなリンゴの出所がふと気になって、隣を歩くアルに尋ねた。

「なぁアル。このリンゴはどうしたんだ？」

「それはボクがお昼ぐらいに買ったリンゴだよ。
赤が綺麗で美味しそうだったから。」

少しだけ目を見開いてから歩調が緩まり、普段通りの声音で返してくる　アルの鎧姿の背中を見つめる。
ガシャリ　ガシャリと、自分よりも大きな足音を立てながらその背中は少しずつ遠退いていく。

中尉だけじゃない

自分の弟さえも、自分の事を支え、応援しているのだと、今が一番そう感じた気がする。

静かに、目を閉じる。

「……そっか。
じゃあ、中尉にも言わなきゃなんねぇけど、お前にも言わないとな。」

「え？何を？」

アルは、後ろでぽそりと呟いたエドを振り返る。
目が合った瞬間、エドがニッと笑って走り出した。

アルを抜かしながら、言った。

「何ってお前、お礼だよ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーありがとな、アル！！」

いきなりの言葉に暫(しば)し惚(ほう)けていたアルだったが、ハッと気付くと「待って兄さん！」と後を追いかける。

街灯によってできた影に何度も何度も追い越されながら、２人は宿（ホテル）へ駆けていった。

（後書き）

題して「ちょっと書いてみた」シリーズ（笑）。

第1弾はハガレンのエルリック兄弟です（「キノの旅」は入れないと言う事で）。

机に向かってゴソゴソやってるエドを書いてみたかった…というのは置いといて。

こんな夜遅くまで開いてる図書館って無いよな……と思いながら…書いてしまいました…。

如何でしたでしょうか？

お付き合いくださり、ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0010y/

真夜中のサンドイッチ

2011年11月11日17時05分発行